



週

末は、いつもより早い時間に起き出して、長い時間走る。そういうプログラムになつていない。無理する必要は全くないし、誰に咎められることもないにもかかわらず、決められた時間割をどうしても律儀に守ろうとしてしまう。生涯の九割を学校で過ごしてしまつたからだろう。こういう性癖が旧習に固執させてしまふかもしれない。警戒を怠らぬようにしよう。

うつすらと夜が明けてきた。梅雨のさなか、雨は降っていないがどんよりと鉛色の空が広がる。湿度も高い。さらに向かい風。こういう日はどうしてもペーすが上がらない。

車もほとんど通らない、町はまだ寝静まつている。その静寂をバリバリと突き破つてプロペラ音が響いた。背中にあつたその音は、やがて隣に来て、目をやると高度を下げたヘリコプターの全身がくつきりと見えた。散歩途中の老人も立ち止まつて空を見上げている。

ドクターヘリが赤十字病院のヘリポートに向かつているところというのはすぐにわかつたが、見るのは初めてだ。音を聞くのは珍しくない。日に何度も聞くこともあるので、それほど意識もしない。でも間近にすると五感を刺激されるためか、想像が広がった。ヘリ

の中にいる搬送される人、パイロット、そして迎える医療従事者、送り出す人たち、まだだれもが寝ている時間に少くない人たちが一刻を争う緊張の中でそれぞれの役割を果たしているのだ。

なぜだか、じわつと胸が熱くなつた。ニュースで見た医療従事者に拍手を送るシーンが浮かんできた。コロナ禍のもと文字通り命がけて働いている人たちがいる。未曾有の異常事態には違いないだろうが、ほとんどの人にとってそれも日常の延長だ。コロナがあらうとなかろうとドクターヘリは二四時間それを必要とする人を運んでいる。コロナと闘う医療従事者に拍手を送るのと同じ気持ちで、あのヘリの人たちに拍手を送りたいと思つた。

学校が一月以上休校になつたとき、親が休めない児童の預かりをした。医療従事者の子もいた。朝の八時から夜の六時まで。毎日十時間、学校で自習をする。小さな子どもには過酷な日常だつた。親も苦しかつたに違いない。でも、預けることで医療を支えた。子どもも不平一つ言わないことで親を支えた。学校だつて彼女らのくらしを支えた。だれもそれぞれに拍手を送らないし、拍手をもらえるなんて想像さえしないのだろうが、せめてヘリといつしよに走っている間、心の中で拍手を送ろうと思つた。



専業ババ奮闘記(その2) 12

木幡智恵美

同窓会 (1)

旅の疲れというより、体調不良がぶり返した感じで、義母の世話や家事は何とかやるものの、武道館での稽古を休んだり、畑には夫だけで行つてもらつたり、ぐずぐずした日々を過ごしていた。いつもの耳鼻科でなく、違う医院で薬を処方してもらうが、やはり薬が切れると咳や痰がひどくなり、体がだるくなる。私の周りに、同じように体調不良続きの人が何人かいて、「この冬、雪も降らず暖かつたでしょう。それで耐性ができなかつたのかな」という人の言葉に、そうかもしれないと納得する。

いつにない不調に、「精密検査したら」と息子が言うので、再募集している人間ドックに申し込む。そして、再度医院に行つて薬をもらい、少し良くなつてきた頃、保育所の、「おじいさん、おばあさんと遊ぼう会」に出席した。ジジにもババにも来てもらつて大はしゃぎの寛大。肝心のおじいさん、おばあさん紹介の際は、固まつて何も言えずにもじもじしていた。夫は、都合がつかず両方とも来れなかつたというA君と一緒に、私は寛大と紙袋を使つたお魚作りをした。できた魚は海に見立てたブルーシートの上に並べられ、先に磁石の付いた竹竿で釣っていく。魚釣りの後はみんなで一緒に昼食を食べて終了。実歩も一緒に連れ帰り、二人を昼寝させてからブロックで遊び、夕食を摂りながら娘の迎えを待った。

もうすぐ、学生時代、共に汗した部活動の同期たちが松江に来る。同期のうち、一歳年上の二人が還暦を迎えた年から、毎年集まることにしたのだ。「もう、いつ誰がどうなつてもおかしくない年じゃろ。年に一回は集まろうで」と言い出したのは、OB会に卒業以来初めて出席した事だつた。以来、呉や宮島など広島近辺での開催が続いていたが、今年は松江で行うことになった。Kから、観光するところと、飲み会の会場を探してくれとのこと。観光先については、あれこれ候補を挙げた中から、「まだ結婚していない子どもがいるMとHのことを考えて、八重垣神社など神社巡りがいいのでは」というKからの返事がきた。そうだ。我が家にも二人、未婚の男子がいた。

30代フリーター やあ、ジイさん。中国全人代常務委員会が香港の反体制的な言動を取り締まる「香港国家安全維持法案」の概要を公表したと報じられている（6月21日朝日新聞朝刊）。

年金生活者 香港市民に対するなりふりかまわぬ抑圧の強化を見せつけられると、日本がずいぶんいい国のように思えてきて、「日本スゴイ」論が恥ずかじげもなく語られる一因を見つけた気になってくる。

30代 中国本土の国民は習近平政権をどう思っているんだろう。

年金 二重の感情を抱いていると推察される。ひとつは一党独裁をゆるめるところか強化してきていることへの不満であり、もうひとつは現状を変えることへの不安だ。経済的な自由とそれに支えられた経済的な発展を保障しているのが共産党独裁政権なら、その転覆は現在の自由と発展の喪失を招くリスクをとまなうからだ。

これは日本国民が安倍政権に抱いている感情といくぶんか似ているかもしれない。年金 社会の分断をおおることによって政権を奪取し、維持してきた彼は苦境に立たされてもお、分断をおおる選択肢しかないと考えているように見える。

社会の分断が進むと、政権担当者は国民の半分近くの不支持を覚悟しなければならぬ。それをよく知っていて全国民の大統領になることを初めから放棄したトランプは、逆に分断をおおって敵をつくり、味方の結束を固めることで政権を維持してきた。

社会の分断は、それまで政治の領域にとどまっていたイデオロギーの対立が社会にまで広がったことを意味する。それを是正するどころか助長するトランプの政治は、平等を掲げる国民国家の理念に反する。それは格差や差別を是とする政治、平等の建前をも捨てる政治であり、貧困や被差別のただなかにある国民にとっては、希望の放棄を強いられるに等しい。

新型コロナウイルスの流行でそのことがむき出しになったところに起き

れない。強権的なところ、公私混同が過ぎるところがあっても、一定の自由と経済的な安定を保障しているのは現政権だと考えていると推察されるからだ。

たいていの人間はよほど困窮しない限り、あるいはその恐れがない限り、現状が変わらないことよりも、変わることにのほうを恐れる。香港市民が身の危険を顧みずに反政府デモを繰り広げてきたのは、長く享受してきた「一国二制度」という香港の現状が変えられようとしているからだ。

30代 中国はアメリカとも対立し、内憂外患の中にある。

年金 米中とともに国内に根深い矛盾を抱えている。アメリカのそれは人種差別に反対する運動となつて、中国のそれは香港への抑圧に抵抗する運動となつて噴出している。新型コロナウイルスの感染拡大の責任を両国がなすりつけ合っている姿に、それぞれの矛盾を覆い隠そうする意図を見ることができる。

た、白人警官による黒人男性殺害事件は、社会の分断とそれを推進する政治を抑圧と感じ始めていた多くのアメリカ国民の不満に火をつけた。抗議デモに黒人だけでなく多数の白人が加わり、デモの一部が「暴徒」と報じられるほど過激化したのは、抑圧の強さと不満の深さを物語っている。

30代 中国の抑圧はそれ以上だろう。年金 ヘーゲルの「東洋人はひとり

両国の矛盾はどちらも政治と経済との間にある構造的な矛盾だ。アメリカは政治的な自由比べて経済的な自由が制約されている。中国は逆に経済的な自由比べて政治的な自由が制約されている。経済的な自由はアメリカが中国を上回っているかもしれないが、ここでいう「制約」はそれぞれの国内の政治と比べてのことだ。

アメリカの経済的な自由の制約は格差の固定化としてあらわれている。格差は競争の自由の追求が招いたものであり、その固定化の要因のひとつが根深い人種差別だ。アメリカの自由な社会はそうした差別のもとになった奴隷制に支えられて発展した。古代ギリシャの民主制が奴隷制の上に成立したように。

30代 白人警官が黒人男性を死なせたことに抗議するデモが全米に広がるなか、一部で起きた略奪などの行為に対して、トランプが米軍の派遣も辞さない」と表明したことがある（6月2日朝日新聞夕刊）。

自由だと知るだけであり、ギリシャとローマの世界は特定の人びとが自由だと知り、わたしたちゲルマン人はすべての人間が人間それ自体として自由だと知っている」という言葉を前にも紹介した（『歴史哲学講義』長谷川宏訳）。習近平独裁の中国は「ひとりが自由だと知るだけ」の歴史段階の残滓を今なお引きずっている。

30代 両国の抱える矛盾がそれぞれの歴史に根差したものだとしたら、その解消は容易ではない。

年金 それぞれの政権担当者が自国の矛盾にふたをするため、互いに相手を攻撃し合う状態もおさまりそうにない。米中の対立を第2の冷戦の始まりととらえる見解がある一方で、1930年代の帝国主義的な覇権争いになぞらえる見解がある。希望があるとすれば、前者の見解が妥当な場合はもちろん、後者の見解が当たっているとすると、この対立が熱い戦争、リアルな戦争に転化することは無いということだ。

ニュース日記 744
中村 礼治

米中の内憂外患